

◆興福寺中門・南面回廊の調査

—第297次

1. はじめに

興福寺では、「興福寺境内整備構想」に基づき、平成10年度から平成19年度までの10年間を第1期整備事業期間として設定し、興福寺旧境内の主要堂宇地区の中金堂、中門・回廊、南大門、および周辺地区を対象に遺構等の整備をおこなうこととした。本調査は、この整備事業に伴う発掘調査年次計画の第1年次にあたり、中門およびその両脇に取り付く南面回廊を含む841.5m²を調査の対象とした。

2. 中門の歴史

興福寺は、平城京外京の左京三条七坊、現在の奈良市登大路町に位置する。

中門の建立は記録にないが、中金堂の建設とともに和銅3年(710)の平城遷都後まもない和銅年間から養老年間の頃のことと考えられている。

中門と中金堂を結ぶ回廊に囲まれた区画を中金堂院と呼ぶが、平安時代以降、この中金堂院に限っていても、永承元年(1046)の火災を最初に、7度の火災を受け、6

図49 興福寺全景・調査区を含む(南上空より)

度の再建を重ねている。特に有名な出来事は、平安時代の末、治承4年(1180)の平重衡による南都の焼き討ちである。興福寺では、火災のたびに再建を重ねてきたが、江戸時代の享保2年(1717)に起こった7度目の火災の後、中門は再建されることなく、明治の廃仏棄釈をへて奈良公園の芝地の一面となっていた。

3. 発掘調査の成果

① 建物・基壇

中門の遺構面は、最も遺存の良好な棟通りの東西部分において、現地表下約5cmで基壇土に達する。中央間に相当する部分では東西約6m幅で参道敷設による削平を受けており、近世以降の松の植樹による攪乱も存在するため、遺構の残りは必ずしも良好であるとはいえない。

基壇の断ち割り調査の結果、中門地区の旧地形は、調査区東半で南に向かう谷がはいっており、調査区南端中央、階段付近で現地表面から約90cm下、同東端の回廊北

側通り付近で110cm下において、旧表土面を確認した。この谷を切土により埋め立て、整地の後、基壇築成をおこなっている。

中門SB7415 礎石はいずれも花崗岩で、基壇上に3基が遺存し、他はすべて抜き取られている。現存する礎石の大きさは上面で約1.2×1.2mをはかる。また、各々の抜き取り穴のなかに数個の根石を確認した。

これらの礎石または抜き取り穴から推定される中門の建物規模は、東西23m(78尺)、南北8.4m(28尺)で、桁行き5間、梁行き2間に復原できる。柱間の寸尺は、桁行き中央3間が16尺等間、両端間が15尺等間、梁行きが14尺等間となる。

基壇は、その平面規模が東西27m(92尺)、南北14m(48尺)に復原できる。基壇の出は、平方向が10尺、妻方向が7尺となる。階段の幅は、中央3間分である。

また、棟通り東から2基目の礎石の東南に近接して、表面に円形の穴を2つ穿った花崗岩を、基壇に据え付け

図51 従鬼像台座石SX7424据付け状況(東より)

られた状態で検出した(SX7424)。上面は東西(横)60cm、南北(縦)30cm、穴は径11cm、深さ20cm、心々が27cmで東西方向に並ぶ。東の穴の中からは、銅・鉄製品が出土した。SX7424は、東端間に安置された従鬼(夜叉)像の台座石と考えられる。

南面回廊SC7416・7417 礎石は花崗岩で、西側基壇取り付き部で1基が遺存し、他は東西合わせて8基の抜き取り穴を確認した。回廊の建物規模は、南北7.1m(24尺)、梁行き12尺2間等間、中門取り付き部の桁行き2.6m(9尺)、SC7417において確認した西の桁行き、4m(13.5尺)となる。基壇幅は、10.6m(36尺)、基壇の出は6尺である。

また、中門および南面回廊基壇上で足場穴と考えられる複数の柱穴を確認した。このうち足場SS7425は、桁行き5間、梁行き2間、柱間は約4mで、柱穴のひとつから14世紀後半の瓦質火鉢が出土した。

② 基壇・基壇外装の変遷

基壇外周において、現在確認される最も古い遺構は、北側の基壇外装にあたる凝灰岩地覆石列と羽目石SX7418、階段の出にあわせて幅54cmに玉石を3列敷きならべた東西妻までの犬走りSX7419、その外側に直線的にめぐる幅40cm玉石敷きの雨落ち溝SD7420である。さらに雨落ち溝側石の外側に玉石敷きSX7421が幅66cmでめぐる。断面観察の結果、据え付け掘りかた埋土に焼土を含み、地覆石に転用のみられることから、この時期をB期とし、それ以前をA期とする。

C期 基壇羽目石の外側に凝灰岩切石をおく(SX7418b)。また雨落ち溝の側石、外周の玉石敷きの一部を抜き取り、凝灰岩切石をおく(SX7421b)。

D期 基壇最上面では、多量のバラス・焼土・土器・瓦を含む複数の積みなおし基壇土が認められ、その上面に凝灰岩による金剛柵地覆石SX7422・回廊棟通り地覆石SX7423の痕跡がのこる。基壇外装では、凝灰岩切石との

間に焼土を含む間層をはさんで、花崗岩による基壇化粧がおこなわれる(SX7418c)。また、外周の凝灰岩切石の上に大きさの不揃いな玉石を用いた石敷きがつくられる(SX7421c)。

E期 西側南縁基壇外周において、切石石列が認められる(SX7438)。これらは、花崗岩基壇外装の抜き取り後に設けられている。

③ 回廊内の遺構

調査区北半にあたる回廊内は、表土から、黒褐色土、褐色土、茶灰色土の堆積がみられ、約40~50cmで遺構確認面である黄色砂整地面に達する。

瓦溜SX7426・SX7427 SC7417の北側で検出した瓦溜。SX7426は創建期の軒瓦を含み、SX7427は永承の火災以降で治承の兵火以前の軒瓦を含む。

地鎮遺構SX7428 中門から回廊内に入った北約7mの地点において、黄色砂上の茶灰色土層から掘り込まれた径30cmの小土坑を検出した。土師器小皿を21枚埋納しており地鎮遺構と考えられる。

柱穴列・小穴群SX7429~7432 回廊内では多数の柱穴を確認した。まとまりを把握できないものも多いが、中門階段正面をはさみ、その左右に並ぶ東西方向の柱列にSX7429~7431がある。このうちSX7430はほぼ同一位置に5回の重複がある。柱間は、2.4m。SX7432は、雨落ち溝SD7420側石抜取りの位置に南北に斜方向に打ち込まれた小穴群。東西は基壇の範囲に収まる。

廃棄土坑SK7433~7436 いずれも瓦および基壇化粧の石材などを多量に含む廃棄土坑である。(次山 淳)

図52 地鎮遺構SX7428 土師器小皿出土状況

图53 第297次調査遺構図 1 : 160

4. 出土遺物

瓦

軒丸瓦103点、軒平瓦80点、丸瓦約5000点、平瓦約12300点、鬼瓦3点他が出土した(図54)。

軒丸瓦 1は6271Bで1点出土。久米寺と同範。6301型式は11点出土。2は6301A。6301Aと認定できるものが6点あり、うち4点が瓦溜SX7426出土。次山淳によると、6301Aには範傷の進行したものとするとする。本調査区出土例は範傷は少ない。いずれも瓦当裏面に(瓦当裏面調整の)布目痕を有する。3は線鋸歯文縁無し葉単弁の軒丸瓦。法隆寺軒丸瓦22Aと同範とされるが、現物照合を要する。以上は興福寺創建期の軒丸瓦。

4は珠文縁、5は素文縁の複弁8弁軒丸瓦。6・7は唐草文・珠文縁の複弁6弁軒丸瓦で、7は法隆寺軒丸瓦62Aと同範。瓦溜SX7427出土。8は中房に巴文を配する単弁8弁軒丸瓦。9は梵字文軒丸瓦。梵字アークの逆字(範型の正字)を配する。他に梵字アークの正字を配する小破片出土。9は新薬師寺例(法金剛院「古瓦譜」所収)と同範だろう。12は三巴左巻軒丸瓦。4～9、12は永承火災以降で、治承の兵火以前の軒丸瓦。

10は中房に4+8の蓮子を配し、11は中房に1+8の蓮子を配する複弁8弁軒丸瓦。ともに養和再建期を代表する軒丸瓦。13・14は中世の三巴文軒丸瓦。

軒平瓦 15は変形忍冬唐草文軒平瓦で6645A。久米寺と同範。顎部の叩き文は、平行叩き痕の残るもの(15左半)と縄叩き痕の残るもの(15右半)とがある。16は上外区・脇区に杏仁形珠文、下外区に線鋸歯文を配する均整唐草文軒平瓦で、6671A。6671型式は15点出土し、6671Aと確実に認定できるものが6点、他も6671Aであろう。SX7426で6点出土。顎部長が8.4cmの長いものから5cmの短かいものまでである。以上は興福寺創建期の軒平瓦。17は中心飾りを有しない均整唐草文軒平瓦で6739A。西隆寺と同範で、奈良時代後半のもの。

18は均整唐草文軒平瓦で、平安時代前期のもの。19は主葉と支葉が連続する均整唐草文軒平瓦。「興福寺食堂報告」28と同範。20は主葉の巻きと支葉とを結合させ、複線で唐草を表現する均整唐草文軒平瓦。「興福寺防災報告」124と同範であろう。19・20とも平安前期の軒平瓦。21はSX7427から出土した特異な文様の軒平瓦。左右両端に半

截した蓮華文をおき、中央下半にも蓮華座風の文様を配する。中央上半の文様は不明だが、動物文と解するののも一つの考えであろう。範型によらないものか厳密にはわからないが、工具による切り込みが残る部分があり、手彫りと粘土貼り付けを組み合わせる瓦当文様を作ったものであろう。SX7427からは、この軒平瓦と組み合う平瓦が多数出土し、そのうち全長のわかるもの13点で27.3cmから30.6cmの間にある。凹面の布目は比較的細かく、凸面に明瞭な叩き痕はない。布の合わせ目がないことから1枚作りであろう。軒平瓦・平瓦のいずれの狭端面にも、わら状圧痕の跡跡が残る、狭端面を下にして乾燥させたことがわかる。

22・23は段顎形態の軒平瓦。22は波状文風の文様(薬師寺・興福寺瓦又資料)に類似するが、先端は巻き込み唐草文軒平瓦である。24は右偏行唐草文軒平瓦で、「防災」140と同範であろう。直線顎。25は中心飾り・主葉・支葉が連続する唐草文軒平瓦。直線顎で、平瓦部凸面は瓦当近くまでタテケズリをおこなう。26はSX7427出土の均整唐草文軒平瓦。「薬師寺報告」267と同範。薬師寺例は段顎だが、本例は直線顎で、平瓦部凸面は瓦当近くまでタテケズリをおこなう。27は線太の主葉を反転させた唐草文軒平瓦。直線顎。28は唐草が連続する軒平瓦。「食堂」66と同範。曲線顎。29は3回反転の均整唐草文軒平瓦。「防災」159と同範だが、本例は外区の圏線がなく範の切り縮めか。曲線顎。30は中心飾りのない左右に別れる均整唐草文軒平瓦。「食堂」62と同範。曲線顎。31は均整唐草文軒平瓦。仁和寺出土瓦(山崎「大和における平安時代の瓦生産」第14図1)に酷似する。曲線顎。32は唐草文軒平瓦。曲線顎。33は均整唐草文軒平瓦で、「薬師寺」344と同範。範両端を切り縮めている。34は木の葉文軒平瓦。「薬師寺」288と同範。曲線顎。35は均整唐草文軒平瓦。

22～34までは永承の火災以降、治承の兵火以前の軒平瓦。22～27(段顎と瓦当近くまでタテケズりする直線顎)が古く、28～34(曲線顎)が新しい。36は養和再建期の均整唐草文軒平瓦だが、文様はくずれる。顎は曲線顎で古い形態をとどめる。15～36まで顎はりつけ、以下は瓦当はりつけの軒平瓦。37は興福寺の銘。38は連珠文。39は菱形唐草文。40は菊水文軒平瓦で、瓦当中央上部に菱形の刻印。東大寺と同範。(山崎信二)

図54 興福寺出土の軒瓦 1:5

図55 第297次調査出土土器 1~20 1:3 21~22 1:6

土器

調査区全体で遺物整理用コンテナ約20箱分の土器が出土した。古代の土師器、須恵器、緑釉陶器から備前焼の埴鉢、そして近現代の陶磁器まで各時代のものがある。

そのなかで主体を占めているのが、後に述べる地鎮的性格をもつ一括埋納土器群と同時期の土師器皿であり、微量の瓦器がともなう。これはその時期に興福寺の焼失と再建が相次ぎ、中門付近にも大掛かりな整地が行われたことを示すものである。茶灰色のこの整地土は細かく砕かれた同種の土師器片を大量に含んでおり、包含されている土器の量は、個体として取り上げた量の何倍にも達しよう。

SX7428一括埋納土器群は、基本的に「ての字状口縁」をもつほぼ似た法量の土師器皿21点からなる。このうち14点を図示した(図55)。図示したものの口径は平均10cmである。また、すべて器厚3ないし4mmと、「ての字状口縁」の皿の中では厚手のものとなっている。色調は橙褐色あるいは茶褐色を呈す。細かく見ると、強く屈曲して端部を丸くおさめるもの(1・2)、屈曲した口縁内面に稜ができるもの(3・4)、屈曲は緩いが端部を丸くおさめるもの(5・6)、屈曲は弱く、端部が外側に面をもつもの(7・8)、屈曲が弱く外面を一段横ナデしているだけにみ

え、端部もほとんど肥厚しないもの(9~11)、屈曲も横ナデも弱いもの(12)などがあり、一括使用の「ての字状口縁」皿のヴァリエティを把握できる好資料といえる。これらにともなって口縁端部を外に引き出すように外反する環に似た形状の皿(13・14)が出土している。年代的には、11世紀後半を中心とする時期に比定することが妥当であるが、永承の火災の直後か、それとも永長の火災の直後のものかを断定することは難しい。状況からして、最初の大規模な整地のし直しにともなうものといえるであろう。

15~22には、この他の柱穴や土坑から出土した土器類を提示した。15は奈良時代に遡る可能性のある土師器小皿でSK7437出土。16~18の土師器と、21・22の瓦器は14世紀頃に比定できるもので、この時期のものも比較的多く出土している。このうち、2点の瓦質土器は浅鉢で、いわゆる奈良火鉢とよばれるものである。その形態や花文のスタンプなどから14世紀後半に位置づけられ、うち21は足場S S 7425の1基から出土したものである。このことから、それが嘉歴の火災後の応永の建て替えにともなうものであることが推測できる。19・20は、さらに時期が新しくなるものであろう。20は、調査区北東のSK7433出土。(高橋克壽)

金属製品

銅製品・鉄製品が多量に出土した。銅製品には、垂木先金具、飾り金具、鋏などがあり、鉄製品には、釘、鋸、手斧刃状品などがある。

銅製垂木先金具は、円形のもの2種類確認された。1つは、復原径が14.5cm、厚さ2.3mmで、薬師寺金堂跡出土の対葉形唐草文を表現したものと類似する。いまひとつは、径12.5cm、厚さ2.5mm。1つの対葉花文と2つのC字唐草文を組み合わせて三角形の花弁を表現し、この花弁4枚を内向きに配列し宝相華を構成する(図56)。柱に留めるための釘穴は中心に設ける。大官大寺・薬師寺など飛鳥・奈良時代の垂木先金具は透彫りと線刻によって文様を表現するが、本例に線刻はなく透彫りのみで文様が表現されている。また、その文様自体も比較的細い線によって表現されている。こうした表現の垂木先金具は、京都府宇治市平等院鳳凰堂、岩手県平泉町中尊寺金色堂の事例がある。対葉花文とC字唐草文による三角形の花弁表現と類似したものには、平安宮豊楽殿出土の垂木先金具、興福寺北円堂寛治再興の埋納品があり、このうち前者は三角形花弁4枚を内向きに配し宝相華を表現したものである。これらの事例から、本例は11世紀から12世紀の所産と考えられる。(加藤真二)

銭貨

表土および褐色土中より、永樂通宝1点、寛永通宝22点が出土した。

5. まとめ

A 今回の発掘調査により、従来文献・絵画資料および地表からの観察にもとづいて検討されてきた中門の規模を明らかにした。礎石および礎石抜き取り穴から判明した中門の建物規模は、桁行き5間78尺、梁行きは2間28尺で、『興福寺流記』に中門は「長七丈八尺、広二丈八尺」、桁行きの柱間は「五間」とあり、これと一致する。また、興福寺の度重なる再建の特色のひとつに、奈良時代とほぼ同じ規模を踏襲して、それぞれの建物の復興を行ってきたことが指摘されてきたが、礎石の位置が確認されたことで、そのことが裏づけられた。

B 中金堂院の罹災と再建は、以下の経過をたどる。

- ①永承1年(1046)12月24日 類焼
- 永承3年(1048)3月2日 供養

図56 垂木先金具

- ②康平3年(1060)5月4日 焼失
- 治暦3年(1067)2月25日 供養
- ③嘉保3年(1096)9月25日 焼失
- 康和5年(1103)7月25日 供養
- ④治承4年(1180)12月28日 兵火
- 建久5年(1194)9月22日 供養
- ⑤建治3年(1277)7月26日 雷火
- 正安2年(1300)12月5日 供養
- ⑥嘉暦2年(1327)3月12日 放火
- 応永6年(1399)3月11日 供養
- ⑦享保2年(1717)1月4日 焼失
- 文政2年(1819)金堂仮再建

伽藍の中心に位置する中金堂院という性格上、火災痕跡は必ずしも成層的なありかたを示すものではない。今回の調査では基壇および基壇外装の改修・重複を確認し、遺構の状況および出土遺物から、A期を創建期、B期を永承から治承、C期を建久再建、D期を応永再建、E期を享保の火災以降に対応させることができる。

C 中門の安置像については、『興福寺流記』に「在四王二軀從鬼八口。宝字記神王二鋪云云。延暦記云。從鬼各四口云云。」とあり、治承以前のありかたを基本に描いたとされる『興福寺曼荼羅圖』では、中門の基壇上に二天像と立像の從鬼を描く。從鬼像台座石SX7424が原位置で発見されたことは、中門安置像のありかたを検討するうえで重要な材料となるといえる。(次山)